



よく通る声と大きな身振りで、参加型学習「チョコレートから南北問題を考えよう!」のファシリテーターを務める岡田祐一さん。ボードの写真は、ガーナのカカオ農園で自ら撮影したものだ

「私たちは子どもに種をまいている」

セミナー当日、会場へ入ると協力隊OBがたたくトーク

て教材作成が開始された。幾度ももわたる打ち合わせやEメールのやり取りなどを経て、今年3月、教材集が完成。収録された各授業は、学校現場で、「国際理解」を授業で扱える時間を考慮し、2〜3時間でも取り組める内容にした。また、小中高のレベルに応じ、「異文化理解」「相互理解」「国際協力」「格差・貧困・不正な貿易」のキーワードで教材を選択できるよう工夫した。

この日、基調講演をお願いした坂本達さんは、4年3カ月にわたる有給休暇で自転車世界一周を果たしたというすごい会社員。ひげをたくわえ、ギニアの民族衣装を身に着けた坂本さんは、旅先で出会った人々や風景のスライドを見せながら、世界の多様な姿や価値観を紹介していった。分科会の講師を務めたのは、教材集作りにかかわった教員3人。岡上美紀さん(広島市立基町小学校)は、昔からガーナに伝わる模様、アディンクラ・シンボルを題材にした授業、「世界の文化を体験しよう!」(マイ・アディンクラ)を披露した。小学校低学年以上を対象としたこの授業の狙いは、ガーナと日本の文化の共通点や相違点に気付くことだ。東岡智富さん(広島市立吉島小学校)は、「君も少年少女海外協力隊にチャレンジ!」という授業で、参加者とともに国際協力の大切さや自分ができることを考えた。そして、参加者たちにカカオの仲間人や農民に扮してもらい、チョコレートに潜む貧困と格差の

問題を体験させ、フェアトレードの仕組みを紹介したのが、岡田祐一さん(広島市立宇品中学校)だ。平和教育や人権教育に取り組んできた岡田さんは、「広島」の原爆を中心とした平和教育に限界を感じていた」と、開発教育を始めたきっかけを話す。「原爆、原爆と教えてきたが、当時問題になっていたユゴ紛争がテレビで毎日報道される中、どっちが子どもにとってリアルティのある戦争なんだと。そんなとき参加型学習というものに出会い、本格的に開発教育の勉強を独学で始めたんです。今では、校内の総合的な学習の時間担当として、開発教育の手法を使った授業の進め方などを、ほかの教員に紹介している。分科会の後、一人の参加者が岡田さんに声を掛けた。「ありがとう。もっと早く知っていたら私も実践できたのに」。彼女は定年退職した元教員だった。「広島って、こういうことを勉強する場がないんですよ。JICA中国の研修会が唯一こうしたことに関心を持つ人がつながれる場所になっている」(岡田さん)。

「世界から教室へのメッセージ - 国際理解に役立つ教材集 - 」

当日参加者に配布されたCD付き教材。この教材には、分科会で進められた各授業の流れが具体的に記されており、CDには授業で用いる写真や配布資料が収録されている。

【目次】 世界の料理・調理実習
世界の文化を体験しよう!
世界の文化を体験しよう!(マイ・アディンクラ)
君も少年少女海外協力隊にチャレンジ!
チョコレートから南北問題を考えてみよう

この教材のテキスト部分は、JICA中国のホームページ (<http://www.jica.go.jp/chugoku/enterprise/kaihatsu/index.html>) からダウンロード可能

JICA中国 所管地区: 鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県
〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
TEL: 082-421-6300(代表) FAX: 082-420-8082




世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。

第15回

教師海外研修から生まれた国際理解教材集

原爆の被災地となったことで、平和教育や人権教育に取り組んできた広島。東広島市のJICA中国は、地域の教育現場で開発教育を実践する人たちの拠点となりつつある。地元市民団体や青年海外協力隊員OB、JICA中国が実施した教師海外研修に参加した教員らが、すぐに使える国際理解のための教材を作成した。そのお披露目のセミナーが、春休みの一日、広島市内で行われた。

教育現場での開発教育に役立てるため、国際協力の現場を視察する教員対象の研修「JICAの各国内機関が毎年実施している。



坂本達さんの基調講演。教育関係者を中心に、子どもや年寄りなど多彩な人々が耳を傾けた

広島市内の教員らが半年かけて作った教材

「どうがうちのカカオ豆を買ってください! 親が病気がちで子どもを学校へやるお金がないのです」
「いや、その値段では高くて買えないですね」
札束を握った仲買業者に買

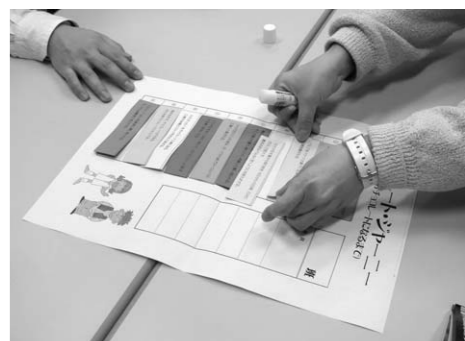
いたたかれ、うなだれるカカオ農家の人々...と思いきや、その表情はなんだか生き生きしている。
ここは原爆ドームから東におよそ9キロにある、広島市留学生会館の一室。カカオ農民と仲買業者を演じるのは、JICA中国の主催により今年3月16日に開かれた「国際理解セミナー 夢にむかって私たちにできること」に参加した人たちだ。
JICA中国では、小中学校の授業ですぐに使える開発教育の教材集「世界から教室へのメッセージ 国際理解に役立つ教材集」を作成した。この日のセミナーは、この教材集に収録された授業を、一般の人にも体験してもらおうという趣旨で開かれたものだ。

JICA中国の渋谷和朗さんは、教材作成の背景を次のように語る。

「JICA中国では毎年教師海外研修を行っており、研修参加者が帰国後に実践している授業をまとめた報告書を作成しています。しかし、報告書にあるような取り組みをもっと多くの先生方に行ってもらうには、もうひと工夫する必要があります。とはいっても問題意識がありました。そんな折、JICA東北が教師海外研修の参加者と教材集を作成したという話に刺激を受け、私たちもこれまでのネットワークを生かしたオリジナル教材を作成してみようということになったのです」

2007年10月、広島市内に勤務する教師海外研修に参加した教員や開発教育に取り組む市民団体のメンバー、青年海外協力隊員OBらによつ

中に種をまいている。芽が出て結果が出るのはいつになるかわからないけれど、いいお花を咲かせてねと思いつながらまいているんです。これは、開発教育に取り組むすべての教員たちの気持ちを代弁したもののだろう。



カカオ豆を収穫してからチョコレートが消費者の手に渡るまでの工程を想像し、台紙に順番に張り付けていく「チョコレート・ジャーニー」。カカオの生産は途上国で行われるが、加工はヨーロッパで行われることを初めて知る参加者もいた